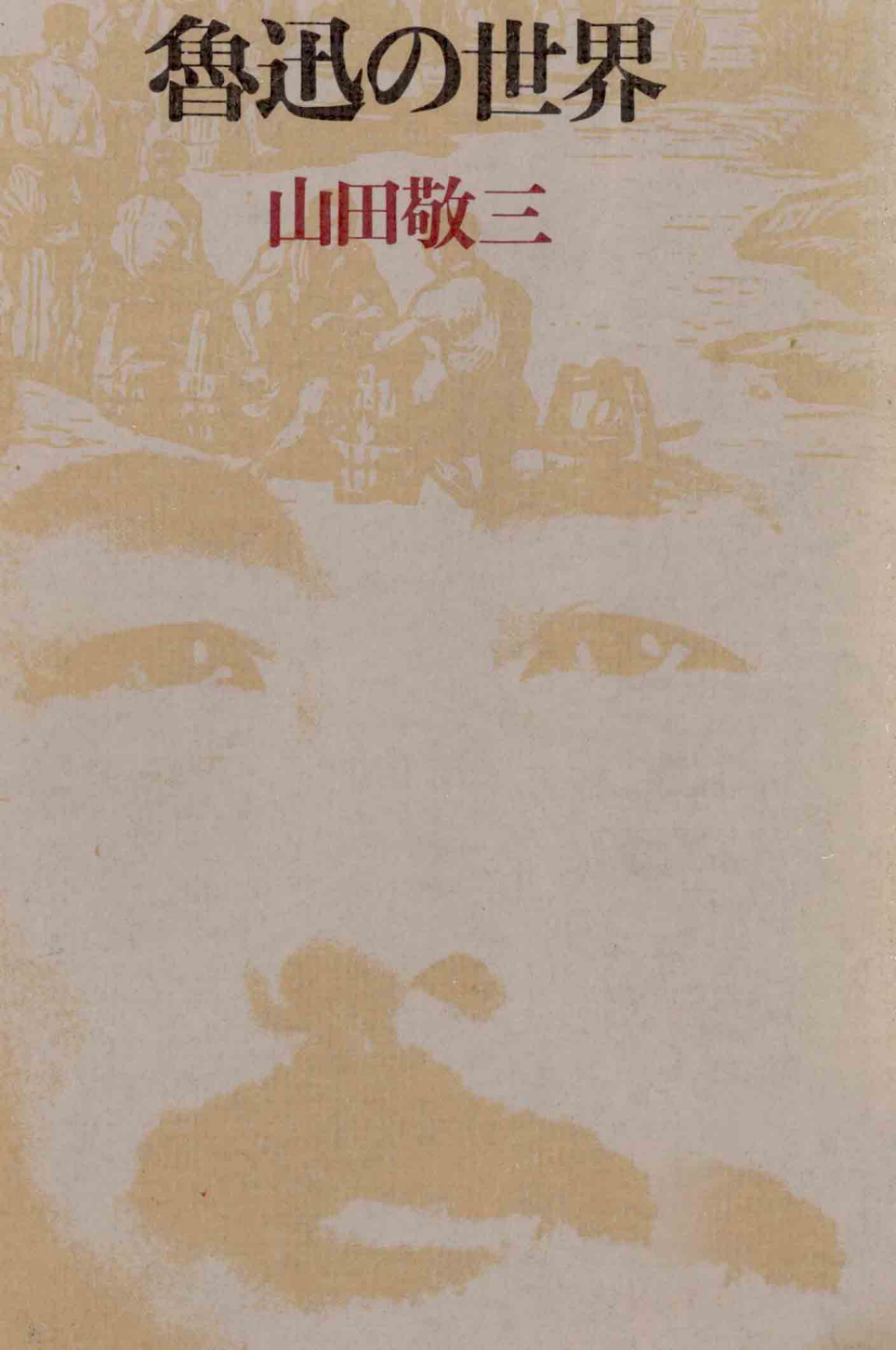


# 魯迅の世界

山田敬三



山田敬三

[illegible]

### 著者略歴

山田敬三（やまだけいぞう）

1937年、兵庫県に生まれる。大阪外国語大学、  
神戸大学、京都大学大学院で中国語・中国文学、  
国語・国文学を専攻。

現在、神戸大学文学部助教授。

論文に「中国政治小説の成立」「中国近代文学の  
展開」等。

## 魯迅の世界

© K YAMADA 1977

一九七七年五月二十日 初版発行

著者 山田敬三  
発行者 鈴木敏夫

発行所 株式会社 大修館書店

101 東京都千代田区神田錦町三一二四  
電話 〇三一二九四一二二（大代表）  
振替 東京 九一四〇五〇四

装幀 長尾 信 印刷 横山印刷 製本 三水舎

『魯迅の世界』に寄せて

陳  
舜  
臣

魯迅にかんする山田敬三氏の文章を、私はこれまでなんとか雑誌で読んだことがある。本書はそれらの文章に、丹念に手をいれて一冊にまとめたものであるという。魯迅のように屈折と起伏の多い文学と人格とは、さまざまな角度からとらえねばならないから、本書のようなスタイルは、有利な点が多い。この場合、有利というのは、おもに読者の側からみてのことである。

日本の魯迅研究には、竹内好という高い壁があり、山田氏に限らず、この壁にむかつての苦しい格闘が、研究者に課せられた運命といえよう。ことに山田氏は、竹内好の押しかけ弟子のような立場らしいので、格闘すべきものは高いだけではなく、手を触れられないほど燃えさかる壁であったはずだ。苦闘であるから、あらゆる角度から相手のスキをねらったであろう。たとえば、竹内が魯迅という鏡に、日本の浪漫的傾向の文学をうつしたわざにならって、山田氏は白樺派の文学をそれにうつし出した。相手の流儀によって、相手に立ちむかったすがたがみられる。

その竹内好も世を去り、魯迅の愛弟子であった増田渉も、竹内の葬儀で弔辞を読んでいる途中でたおれた。竹内の死のまえに、武田泰淳の死があった。かつての中国文学研究会の同志たちは、この半年ほどのあいだに、折り重なるようにしてたおれた。古つわものたちは、遺すべきも

のを遺して世を去ったのである。

壁は依然として高く、そして灼熱している。だが、彼らの死は魯迅研究に新しい時代が来たことを告げるかのような。本書はそのような「時」に世に出る。山田氏は本書を季節はずれの青春の記録と言っているが、けっして季節はずれではなく、まさに時に逢ってあらわれたものといえよう。山田氏の言によれば彼の研究の存在意義は、魯迅の日本的虚像への反措定としてであるという。その虚像は限りなくひろがっており、輪郭部はまだ泡立ちながら拡大をやめようとしている。それとの組み討ちは、はてしなく長い作業になるにちがいない。

本書はその長い戦いの出発点として、山田氏が足場をたしかめ、そして踏みかためた仕事といえるだろう。われわれはスタート付近の観客として、拍手とともにこの『魯迅の世界』を送り出したい。

一九七七年三月

## 目 次

### 『魯迅の世界』に寄せて

陳 舜臣

### 第Ⅰ部 魯迅の形成

新世界への脱出——修学時代—— 3

1

一 旧家の没落 二 南京修学 三 離騷に託して 四 民俗と夢

五 散る花を惜しむ 六 新しい小説 七 小説界革命の下に

文学と英雄の系譜（上）——留学時代前期—— 54

一 自ら小像に題す 二 共和革命の主張 三 悲しみと怒り

四 屈辱と悲哀 五 沈黙の中で

文学と英雄の系譜（下）——留学時代後期—— 90

一 △新生▽の流産 二 ロマン派宣言 三 物質万能の否定

四 出会い 五 最後の英雄像

新旧のはざま——教員時代—— 121

一『城外小説集』 二教員生活 三新旧のはざま

蹉跎から呐喊まで——役人時代—— 138

一辛亥革命 二反革命の進行 三崩れた夢 四寂寞の中で

五仏典の購入 六「呐喊」前夜

## 第Ⅱ部 魯迅の文学

屈原を葬る——魯迅のリアリズムとロマンティズム—— 175

一中国知識人の屈原像 二魯迅の楚辭觀 三屈原を葬る

魯迅と「白樺派」の作家たち 192

一武者小路実篤『或る青年の夢』 二有島武郎『小さき者へ』

三『壁下訳叢』の白樺派 四魯迅の「白樺派」受容

火を盗む者——魯迅とマルクス主義文芸—— 230

一ロシア革命の遠景 二マルクス主義への関心 三革命時代の

文学 四関係文献の購入 五ルナチャルスキーとブレハーノフ

六文芸政策の位置 七火を盗むもの

## 第Ⅲ部 魯迅の世界

戦後日本の魯迅論 275



魯迅と郭沫若——その九州大学との関係—— 287

創作の筆をたつとき——境界としての「三・一八」事件 294

魯迅の世界——『野草』の実存主義—— 301

付録 魯迅旧詩『自題小像』の成立 316

注釈 329

あとがき 357

追記 363

カバー木版画 龍延覇作「水を待つ」

神奈川県立近代美術館蔵

『中国木版画展』画冊より

カバー写真 『魯迅』（文物出版社）より

扉写真 同右

口絵写真1 同右

口絵写真2 『魯迅詩稿』（文物出版社）より

第I部

魯迅の形成





## 新世界への脱出

——修学時代——

かりに物心ついてからの事実であれば、ただ苦痛としか感得されない凄惨な事態であっても、それが幼ない日々の淡い追憶につらなる時には、人は往々にしてその陰の部分を甘美な懷想の絵筆で暈取くまどりするものである。まだ名前を樟寿、号を豫山ないしは豫才と呼ばれていたころから、名を樹人と改めて南京へ修学に旅立つ前後十数年間のそうした回想を、魯迅はその恵まれた文筆によって克明に記録した。それらのあるものは短編小説集『呐喊』の一部となり、さらにまとまった形では、自伝的要素を帯びた回想小説ふうの『朝花夕拾』となつてぼくらの前にある。

また周作人という四歳年少の文才ゆたかな次弟に慕われたために、魯迅の回想の軌跡は、側面からの有力な傍証を伴なうことで、とうてい普通には望むことのできない精緻な立体図を構成する。幼少期に魯迅のはぐくまれた〈家〉と〈人〉とについては多く作人が語り、そのころの微妙

な心の襞<sup>せ</sup>については魯迅みずからの筆が遡及する。そして彼らは共通して故郷での民俗に強い関心を示し、それらが自分たちの遊戯にとりこまれた記憶への愛着を書きとめることで、中国江南地方の豊富な民俗資料を今日にまで伝承した。

しかし魯迅の文学にこの上なく執着するぼくらにとっては、関心の対象は、そのようにありあまる資料の中から、もっぱら魯迅文学の形成にあずかつて力のあつた魯迅幼少期の原体験をくみあげることであり、魯迅文学の源泉を掘りおこすことにある。その方法はただ一つ、魯迅自身をして語らしめることをおいてはない。

ここでは、ぼくらの目にふれる材料を、こうした企てにあわせて改めて構成しながら、後年の魯迅の文学をもう一度みなおす一つの契機を作りたく思う。魯迅の回憶は、その甘美なものをも含めて強力な手がかりとして洗いなおし、また彼が少年時代に詠んだ習作旧詩も、その未熟さの故にこそ検討を試みる必要があるだろう。しかも奇妙なことに、後者については、これまでも完全な形でぼくらの前に提示されたことは、まだ一度もない。

習作旧詩の日本での紹介のされ方についていえば、おそらくは十数年も前に、東京の学生を中心とした魯迅研究会のメンバーが、彼らの会誌の中で、まだほとんど試訳としかいい得ない形で披露したものが、それらの全般的な鳥瞰の唯一の例であるだろう。

その後公刊されたものでは、石川忠久氏の『魯迅の旧詩』一編があるけれども、これは「現代に於ける旧詩という視点から詩人としての魯迅を考え」ることを意図した短い論評であつて、魯

迅の習作旧詩全体の展望を目ざしたものではない。ましてや「魯迅の本質はさて置」かれていたのであって、後年の魯迅を生成する過程を有機的に考察した文ではなかった。

岩波書店版『魯迅選集』も、留学初期の作品と推定できる『自題小像』以後の旧詩作品を、主に訓読によって紹介したものであり、それらとは傾向を全く異にする習作旧詩のためにはスペースが割かれなかった。また魯迅旧詩の専著であるはずの高田淳氏『魯迅詩話』も、なぜか記述対象を岩波版のそれにほぼ限定してしまった。

数多い魯迅論の中でも、習作旧詩はいわば死角を形成している。「文を論ずる場合、最もよいのは全篇に目を注ぐことであり、そのうえ作者の全人格および彼の生活した社会状態に目を注ぐ」ことである、といった魯迅のことばは、もう一度思い起こされねばなるまい。第I部の前半が、「まずまずの暮らし向きからどん底生活へおちこんだ」魯迅が、江南水師学堂での修学にむけて傾斜する道行を魯迅の筆によりつつ組みなおし、後半があえて習作の列举に比重を高めたのは、このようにして可能な限り、魯迅に迫ってみたかったからである。

とはいっても、上述の願望が、自身の力量不足からどの程度にみたされたかは疑わしい。予想される数多くの誤りについては、忌憚のないご批判をいただければ嬉しい。

## 一 旧家の没落

紹興は水郷である。たてよこいずれも数キロにしかない小さな街の中を、東西にほぼ十本、南北にも五、六本の堀割が、河岸までいっぱいに水をたたえている。春には柳絮りゅうじょと呼ばれる柳の実が、綿吹雪を作る。紹興酒の瓶かみを積んだ小さな舟が、そんな中を真つ白になりながら静かにこぎ進んでゆく。堀割が道路と交わる所では、アーチ型の太鼓橋があつて、船頭は首を傾けるようにしてその下をかくぐる。そのころになると、柳の葉に照り映えていた桃の花の紅はもうとつくに散りつくしていた。

街は城壁にとり囲まれていた。主要な道路には歳月のあとをきざんだ石だたみが、一面に敷きつめられている。はるか二千数百年前、春秋の時代に越王勾践こうせんがここに都をおいて以来、紹興は江南地方をとりしきる枢要の地の一つであつた。古来、数多くの学者を送り出したが、清朝実証学の分野で、それはとりわけいちぢるしかった。「江浙は人文の淵藪」といわれた江蘇・安徽・浙江三省の、紹興は中心地帯である。学者にも役人にもなりそこねた読書人子弟は、幕友として地方長官などの秘書役をつとめた。ここはそうした「紹興師爺シャオシンシイユ」の産地でもあつた。

この街の中心部よりやや南より、木蓮巷と呼ばれるクリークぞいに、高い塀に囲まれた一軒の屋敷がある。入口には古びたあや模様の透かし彫りを施した扉がとりつけられ、その上部には中

二階ふうの建物があつて、そこからは長方形の小さな窓が、南側の道路に面して開いている。建物の裏側には「百草園」と名づけられた二畝ばかりの菜園があり、そこは子どもたちのかつこうの遊び場になっている。「青々とした蔬菜のうね、すべっこい石の井戸わく、背の高いサイカチの木、すおう色の桑の実」などはいうまでもなく、「木の葉がくれにセミが声をはりあげ、ふとった雀蜂は菜の花にうずくまり、身軽な雲雀が急に草むらから雲の中へ」飛んだりした。このあたり一帯は東陶坊、一般には東昌坊口といわれている。

魯迅（一八八一——一九三六）が生まれたのは典型的な地主の家庭であつた。その家族が所有する土地は約三十ヘクタール（魯迅の表現では四五十畝）、規定された生産高（一畝につき九十キロ）の約七十パーセントの小作料が、三代にわたる一家十名の主要な生活費であつた。祖先には数代前から科擧（国家試験）の登第者があり、祖父福清（贈り名は介孚公）は一族で初めて最終段階の殿試に合格した進士である。父儀炳（伯宜公）も郷試にはついに最後まで合格しなかったが、予備段階の三つの関門をくぐって生員（秀才）の資格は得ていた。母方の魯家でも、外祖父晴軒公は郷試を突破した舉人であつて、そのふたりの息子、つまり魯迅にとつての伯父および叔父はいずれも「秀才」である。

このような家庭環境の中で、魯迅自身も、地主で官僚を兼ね、一族の中には質屋を経営して高利貸しをする者もあるという文字通りの旧家、周家の嗣子として、とうぜんのことながら科擧応募のための、伝統的な受験教育を幼時からたたきこまれていた。病身の父伯宜公が、自らの見は



てぬ夢を長男に託して、ほとんど発作的とも思えるような厳格な鍛錬を魯迅に課したエピソードを、ぼくらは今日『五猖会』の回想によって管見することができよう。かりに家庭内の変事がなければ、成人後の周樹人も、あるいはせいぜい旧体制の齒車の一つに収まっていたかも知れない。

だがしかし、運命の皮肉は、周知のとおり、魯迅のようやく物心ついたところに、一家の没落という形で急速に訪れた。一八九三年二月、母親（魯迅からは曾祖母）の死去にともない、任官先の北京から帰郷した介孚公が、郷試の試験官買収を頼まれた事件で獄に下り、同年冬には、伯宜公がついに再起することのなかった病との三年にわたる闘いに入った。そのいずれもがまず魯迅一家を経済的な窮乏においこみ、魯迅のあらかじめ定められて、ほとんど不変とも思えた将来計画に重大な変更をもたらす。

それまでの魯迅は、周一族の中でもそうとうな勢力をもつ智興房の、前途有望な若だんなである。母の実家である安橋頭を訪れては、村人あげての歓迎を満喫し、社交辞令で半ばあったかも知れないにしても「将来はきつと状元におんなさる」というほめことばを村の老人から施される境遇にあった（『村芝居』）。その若者が一転して、人々から「こじき」呼ばわりされたという。この苦い体験が、後年の魯迅、ひいてはその文学に影をおとさなかったはずはない。

もっとも、たとえ同一の環境や事件に遭遇しても、人はその立場や年齢、感受性等の相違によって、それらを自己の内面にとりこむとりこみ方には、どうしようもないほどの決定的な差異を